

【一】次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

なぜ、女性が活躍すると企業が活性化されるのでしょうか。

一九九〇年頃までの工業時代は、少品種大量生産の時代でした。また豊かではない時代には、誰もが生活を豊かにするために必要なモノを欲しがりました。日用品、家電製品、自家用車など、便利なものを手に入れることが、人々の目標だったからです。「一」企業は、みんなにとって必要だと思われる同じような製品をたくさん作って、たくさん売ることによって、利益を上げることができました。①そのような時代には、とにかく労働者を長時間力（ア）任せに働かせて、モノをたくさん作れば、企業は利益を上げていけました。だから、家庭から引き（イ）ハナされた男性を企業の中で長時間働かせることが慣習になってしまったのです。

「二」社会が豊かになり、サービス業が中心になりグローバル化が進むと、モノを作れば必ず売れて利益が上がるという時代ではなくなりました。みんな、一通りのモノを持っています。そこで、企業はコストを（ウ）削減するため、生活必需品は可能な限り賃金が安い海外で生産しようとしています。一方、先進国の豊かになった人々は、同じ機能を果たすモノやサービスでも、プラスアルファ、つまり「付加価値」があるものを求め、そのようなものにお金を払うようになります。

②プラスアルファの付加価値にはどのようなものがあるでしょうか。「三」自家用車では、環境に（エ）ハイリヨしているとか、デザインがかっこいいとか、おもしろい機能がついているとか、乗り心地がよいとか、さまざまなプラスアルファを売り出した車が開発されています。そして重要な点は、どんなプラスアルファを求めるかは、人によって異なるということです。同じ商品でも、ある人は健康を、ある人は環境を、ある人は特別な機能を、そして中には単なる安さを求める人がいます。どの人にもどのような商品が売れるかは、なかなかわからない時代になっています。

「オ」そのようなプラスアルファを作り出し、それを欲しい人に提供することに関しては、女性は、男性に比べ経験的に優れた能力を持ち合わせています。

私が通っている歯科医院には（オ）ドクトクのサービスがあります。それは、マッサージ師が（カ）ジュンカイし、治療中に足裏をマッサージしてくれるのです。院長は女性で、患者さんにリラックスして治療を受けてもらうにはどうしたらいいかを考えた結果、採用したそうです。ただ虫歯が治ればよいと考えるのではなく、患者の気持ちを思い、患者が望むであろうモノやサービスは何かを考えた結果出てきたサービスです。

「キ」③女性は、新しい時代に必要な能力をどのように身に付けたのでしょうか。一つのエピソードがあります。在る小学生の女の子が友人の誕生日のプレゼントを買いに行きたいと言うので、父親が（キ）ツキソつた時のことです。女の子は、買うプレゼントがなかなか決まりません。父親がこれにしたらと言うと「〇〇ちゃんに似合わない」などと言います。ここで、父親は気がつくのです。女の子は、女の子同士のつきあいの中で、誰にどんなプレゼントをあげれば喜ばれるかを常に考えながら行動しています。その経験が、社会に出てから使う側に立った商品の開発や、④人を気持ちよくさせるサービスの提供に生かされているのではないかと。

男性にその能力がないとっているわけではありません。ただ、強ければよいという発想で生きている多くの⑤男性は、子どもの頃から、新しい経済に必要な能力を（ク）クレンする機会になかなか恵まれないということです。

そして今は、グローバル化によって商品だけでなく、サービスも国際化しています。日本の商品が海外で売られるだけでなく、日本に来る外国人観光客も増えています。そして、日本のサービスを売りにしたレストランや美容室などのサービスの海外進出が増えています。その中で注目されているのが、日本的「おもてなし」というサービスです。従来の日本女性があたりまえのように⑥提供してきた、相手の立場に立って考えるサービスが、海外でも注目されているのです。

これが、現代社会において企業で女性を活用しなければうまくいかなくなっていく理由です。相手の立場に立って考える商品、サービスを開発するのに大切なのは、女性の登用だけに限りません。今、企業経営の分野では、ダイバーシティという言葉をよく聞くようになりました。ダイバーシティというのは、多様な人材という意味です。⑦今まで、日本企業では成人男性が同じようなものを作ってきましたが、それでは今の経済で利益を上げ続けることはできません。女性や外国人など多様な発想を持った人が、一緒に活躍して新しい商品やサービスを作り出していくという、海外では当たり前になっている生産方式が必要になっています。多様な人材を登用しなければ、日本企業は利益を上げるところか、生き残り（Ａ）も難しくなっているのです。

問一 本文中の二重傍線(ア)～(ク)のカタカナを漢字に、漢字は読みに直しなさい。

問二 本文中の空欄(ニ)～(ミ)に次の中から適切な言葉を選び、記号で答えなさい。

- 1 では 2 そこで 3 たとえば 4 もしくは 5 そして 6 しかし

問三 本文中の空欄Aに、ひらがな二字の副助詞を考えて答えなさい。

問四 傍線①「そのような時代」について次の問いに答えなさい。

- (1) この時代の人々はどうなことを生活の目標としていましたか。本文中の語句を用いて三十字以内で答えなさい。
(2) この時代の産業のありかたはどのようなものでしたか。本文中から七字で抜き出して答えなさい。

問五 傍線②「プラスアルファの付加価値」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 本文中から具体例を一つ答えなさい。
(2) 「プラスアルファの付加価値」の持つ性質の特徴は何か、考えて二十五字以内で答えなさい。

問六 傍線③「女性は、新しい時代に～身に付けたのでしよう。」について、次の各問いに答えなさい。

- (1) 「新しい時代に必要な能力」とはどのようなものですか。本文中から二十五字以内で抜き出し、解答欄に合う形で答えなさい。
(2) 男性と違って、女性がこのような能力を身に付けることができた理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
ア 男性は数値化できるものを基準にして判断するのに対して、女性は人の好みや趣味などを判断材料にしているから。
イ 男性は仕事で結果を出すことを中心にしているのに対して、女性は仕事の方法を考えることを重んじているから。
ウ 男性は時間や手数をかけず合理的に仕事をするのに対して、女性は十分時間を取ることに価値を置いているから。
エ 男性は自分の力を示すことを大切にしているのに対して、女性は相手の気持ちを考えることを大切にしているから。

問七 傍線④「人を気持ちよくさせるサービス」を言い換えている表現を本文中から二十字以内で二つ抜き出し、それぞれ最初と最後の五字で答えなさい。(句読点を含む)

問八 傍線⑤「男性は」、⑥「提供してきた」は、それぞれ本文中のどの言葉にかかりますか。それぞれ文節で抜き出して答えなさい。

問九 傍線⑦「今まで、日本企業では～できません。」について、次の各問いに答えなさい。

- (1) このような状況になった理由として、最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 今の時代の消費活動の対象は女性や外国人なので、男性の画一的な発想では売れる商品を作り出せないから。
イ 女性的な繊細さが求められる今の時代には、大きさや量を重視する男性の考え方が消費活動には不適切だから。
ウ 現代は消費者のニーズが複雑になっているので、色々な視点に立って商品開発をしなければならぬから。
エ 今はサービス業が産業の中心であるが、サービスを提供する経験の少ない男性だけでは発想が貧困だから。
(2) 今後、企業にはどのようなあり方が求められると思いますか。本文中の語句を用いて六十字以内で説明しなさい。

【二】次の文章は湯本香樹実の「夏の庭」の一節である。次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

小学六年の「山本」と「河辺」と「ぼく」の三人は、近所に住む一人暮らしの「おじいさん」が間もなく死ぬかもしれないという、うわさを聞き、人が死ぬところを見てみたいという興味から「観察」を始める。やがて、ふとしたことから、「おじいさん」と交流を持ち始める。夏休み中の八月、三人が「おじいさん」の家や庭の修復を手伝ってから間もなく、台風に見舞われる。

やつぱりだ。おじいさんの庭は大きなみずたまりになってしまっている。つんと立っているのは雑草ばかりで、**A** **コスモス**はあちこち勝手な方向を向いて、水の中にぐったりとたおれている。だめになってしまいかもしれない。

目の中に雨が吹きこむので、顔をしかめながら、ぼくはしばらく**(ア)** 塀の外で突っ立っていた。傘は持っていない。持っていたって、なんの役にも立たないだろう。

「何しているんだ。早く入れ」

玄関の扉が十センチくらい開いて、おじいさんの顔がのぞいた。風にさからって扉を開けているのだろう、**(一)** **歯をくいしば**っている。

「早く」

駆け込むと扉が大きな音を立てて閉まった。後ろで風がひよおーっとうなりながら、遠ざかっていく。玄関に立ったまま、おじいさんが出てくれたタオルで頭を拭いていると、見おぼえのあるスニーカーが二足、目に止まった。

「やあ」山下が畳の部屋から顔を出した。

「やつぱり来ちゃったか」河辺が飛び出して来た。「靴下、ぬいじゃえよ」

ぼくはびしょびしょの靴下をぬぎ、シャツとズボンの上からでも、とにかく全身を拭いた。タオルはもう、水気ですっかり重くなっている。「おじやます」

「はい、こつち」河辺はタオルとぼくの靴下を受け取ると、さっさと風呂場に行った。「うちの二階から外見ていたらさ、おちよこになった傘持ってだれかが歩いているんだ。そしたら河辺じゃない」山下は、こーんなになっちゃってさ、と、風にさからってメガネを押さえながら歩く河辺の様子を**(イ)** 真似して見せた。「コスモス心配だから見に行くって言うから、いっしょに来た。おまえも」

「うん」ぼくはふたりに先を越されたみたいで、ちょっとおもしろくなかった。

「洗っておいたぜ」河辺は風呂場から戻って来ると、まるで自分のうちにみたいに座りこんだ。

「まあ、座れ」おじいさんはいばん窓ぎわの自分の場所に、どっかりと落ち着いている。ぼくは**①端のほうに、**ちよつと遠慮して座った。

「何していたの」

「何って、別に」ふたりは顔を見合わせた。

「別に、じゃないだろ、おまえら」おじいさんは、**②妙に上機嫌だ。**

「なんだよ」

ふたりはにやにやしている。

「いいよ、教えたくないんなら」なんだよ、仲間はずれにしゃがって。

「賭け。おまえが来るか、来ないか」山下が言った。

「オレが」

「そうそう」

「なあんだ」なあんだ。

「なんだじゃない、こつちは。なあ」河辺と山下は、**(三)** **口をとがらせた。**

「で、だれが勝ったの」

おじいさんが人差し指を、自分の鼻に当てた。「さあ、おまえらにアンマしてもらわなくちゃな」

山下はおじいさんの肩をもむ。河辺は左足。そしてどういいうわけか、ぼくが右足。

「どうしてオレまでしなくしゃならないんだよ。賭けたのはおまえたちだろ」

「文句言うな。こうなった原因は、おまえにもある」河辺が言った。

「メチャクチャ言うな」

山下はおじいさんに馬乗りになり、うんうんいいいながら太い指で肩をもんでいる。「ね、うまいでしょ」

「うううっ」うつぶせになったおじいさんは、目をつぶり顔をしかめてうめく。

「オレ、おとうさんの肩、よくもむんだ。慣れたもんだよ」

「ううっ」

「おとうさんの肩は、おじいさんの三倍はあるからね」

「うううっ」

「気持ちいいでしょ」

「ううううっ」

「ね、もっと強いほうがいいかな」

「うう——っ」

「言つてよ、遠慮なく」

「い、痛い」

「③なんだ」山下はおじいさんの肩を放した。「それならそうと、早く言えばいいのに」

おじいさんは、ぜえぜえいつている。

ズボンを膝までまくりあげると、おじいさんの脚はとてもやせている。かたい骨のまわりの薄い肉と皮膚は、骨と仲よくなんかしたくないみたいに、僕の手の中でゆるゆると動く。ぼくのおとうさんの脚には毛がいっぱい生えているのに、おじいさんの脚は油紙のようにつるりとしていて、そのくせ、さわるとふわふわして頼りない。なんだか

4

手ざわりだ。

「おい右足」うつぶせになったまま、おじいさんが言った。

「オレ？」

「おまえ、アンマしたことないんだろ」

「うん」

「なさないやつだ」

ちえっ。ぼくはそれまでかなりこわごわとやっていたのだけれど、くやしいのでぐっと力をいれた。

「ムキになるな……そうそう、なかなかよくなった。ちよっとテレビをつける」

⑤いい気なもんだ。ぼくは立ち上がってテレビをつけると、またおじいさんの脚をもんだ。

ニュースが、どこか遠い国で戦争がはじまったと言っている。離陸直前の戦闘機が並ぶ。夜の（ウ）滑走路が画面に映っている。整備士や旗を持った男の人がきびきびと動き回る中で、飛行機はゆったりと羽を広げる鳥のようだ。ヘルメットをつけたパイロットが誇らしげに手を振る。映画みたいだ。

「戦争にいったこと、ある？」

組んだ両手の上に頭を（エ）載せて、横目でテレビを見ていたおじいさんは、ぼくのほうをちらっと見た。そしてテレビの画面を見つめた。

「あるよ」

「飛行機に乗った」

「乗らない」

どんなことしてたの

がれき

「戦争だからね」おじいさんはテレビを見つめたまま言った。画面には、瓦礫になった街が映っていた。

「ね、話してよ。戦争の話。なにしてたの」手だけはアンマしながら、河辺は⑥目をらんらんと輝かせている。

「ジャングルの中を歩いていた」

「歩いていただけ」河辺は不服そうだ。「ねえ、話してよ、もっとくわしく、さ」

おじいさんは何も言わずに起き上がると、テレビをぼちんと消した。⑦とたんに雨の音が大きくなる。どこかで出しっ放しの風鈴が、めちやくちやに鳴っている。

「ねえったら」がまんできないというように、河辺が全身を揺らした。

「忘れた」おじいさんがあぐらをかいて座りこむと、

「だめだよ」河辺は（目）黄色い声をあげた。

「うるさいやつだなあ」

「話してよ」ぼくが言った。「戦争ってどんなものか知りたいよ」

おじいさんはしばらく考えていたけれど、「こわい話だぞ」と言ってまた黙った。右膝が小さく揺れている。それからぼくをそろりと横目で見ると、⑧かたく目を閉じてしまった。

【三】次の文章を読んで、後の問題に答えなさい。

「ヒンシユク」を漢字で書けば「顰蹙」となり、本来は他人の言動を見聞きし、眉をひそめて不快の気持ちを示すことを意味した。「顰」とは眉をひそめること、「蹙」とは顔をしかめることをいうのだが、そんな難しい漢字を使った単語がこれほどに気軽に使われるのは、パソコンや携帯電話でいともたやすく漢字に変換できるからにちがいない。

このことばの出典は『莊子』の「天運篇」で、原文は以下の通りである。

西施、心を病みてその里に顰す。その里の醜人、見てこれを美とし、帰って心を捧ちてその里に顰す。その里の富人は①これを見て、堅く門を閉ざして出でず、貧人はこれを見て、②妻子を携えて走る。③かの人は顰の美なるを知りて、④顰の美なる所以を知らず。

古代中国の伝説的な美女であった西施には胸の持病があり、時々顔をしかめ、痛みを耐えていた。絶世の美女が苦しげに顔をしかめる姿は、大変に美しいものであった。それで同じ村にいた「醜人」が、同じように胸をおさえては顔をしかめてみたところ、村の金持ちたちは戸を閉ざして外出しなくなり、貧しい者たちは妻子をつれて他の村に移り住んだ、という。この話から、（5）を「顰みに效う（ひそみにならう）」といい、また「顰蹙」というようになった。

（阿辻哲次『遊遊漢字学』）

問一 傍線①「これ」の指示内容を二十字以内でまとめなさい。

問二 傍線②「妻子を携えて走る」理由を述べなさい。

問三 傍線③「かの人」とは誰を指すか。次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 西施 イ 醜人 ウ 富人 エ 貧人 オ 妻子

問四 傍線④「顰の美なる所以」を述べた次の文の空欄に（A）は十一字で抜き出し、（B）には二字で適語を抜き出しなさい。

（A）が美しいのではなく、（B）が美しかったこと。

問五 （5）に入れる語としてふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人や物の外見の美しさや派手さにはかり目がいき、本当の価値が見抜けないこと
イ 生きていく中には、皆からちやほやとされる時もあるが、そうでない時もあること
ウ 困っている時にその場しのぎをして、本当にすべきことを行わず、事態を悪化させてしまうこと
エ 実力や身のほどを知らず、すぐれた業績や行為をただ外面だけ模倣すること

【四】次の各問いに答えなさい。

問一 次の歴史的仮名遣いで書かれた語の読みをひらがなで書きなさい。

① あいぎやう ② 吹きあふぎて ③ まゐらせて

問二 次の傍線部で「はひふへほ」と発音するものを一つ選び、記号で答えなさい。

そこはアかトなく とぶらイひ（訪ひ） 読ませ給ウ 知り給エず ものぐるほオしけれ